

## 蓮如にみる無我について

——「人間中心アプローチ」を視点として——

### 吾 勝 常 行

今日、現代には宗教が、宗教には現代が根本的に欠落しているといわれる。どの既成教団においても、現代人に即した宗教的役割が問われているのである。真宗教団においても、いま「現代人のニードに的確に応えうる教学・伝道」が求められている。これを真宗念仏者の課題として捉えなおせば、不安や苦悩をかかえて生きている人々にびったりと寄り添い、その人の心の叫びに耳を傾けて聞き応える態度ができていくかということである。たとえば、法座の場では仏法を説く人（住職等）、聞く人（門信徒等）と分ける現状がある。これはその立場が社会的制度上だけでなく、心理的にも一方的に住職は説き、門信徒は聞くものという潜在意識を作り上げ、固定化閉鎖化していることを示す。この一方的な説き手・聞き手という二元論的断絶から現代の様々な矛盾や不信感、更には主体的な聞法や教化を妨げる問題が派生しているように感じられる。この根本的問題である二元論的断絶をどうこえ

るか、換言すれば、現代人に即して真宗の教法が活現するとはどうあるべきか、具体的実践的な側面からアプローチしてみたい。拙論では、真宗における対人的態度を顧みて、「積極的傾聴」の態度を追求した現代臨床心理学者C・R・ロジャーズの「人間中心アプローチ」に学びながら、蓮如の対人的態度を手掛かりに、蓮如にみる無我について考察する。

まずロジャーズの「人間中心アプローチ」を要約すれば、「援助的人間関係において、相手の自己実現化傾向を尊重するカウンセラーの態度が自己一致・無条件の積極的関心・共感的理解（積極的傾聴）の三条件として満たされ、相手に伝わり成長促進的雰囲気を作り出すことができるならば、そのなかで相手は自己自身になっていく」といえる。更にロジャーズはこの共感的理解について言及し、共感とは過程であって状態ではないという。この過程では、クライエントにおいては疎外感を解き放ち、自己の存在価値が認められる。従って

真の共感とは評価的・診断的特質から解き放たれたものである。苦悩の中で自分の存在価値を見失っているとき、この共感的態度に出会うならば、「その深い理解のなかで最も貴重な賜物が相手に伝わっていく」という。この積極的傾聴を伴う共感的過程を視点として蓮如の対人的態度を見直してみたい。

本願寺法主を継承した蓮如がまず直面した問題は、門徒庶民との断絶をどう回復するか、真宗と称しながら親鸞の精神を見失い異端に迷う僧侶門徒の中に仏法が繁昌するとはどうあるべきかということである。蓮如は「平座」を独創するが、平座によって従来の貴族的態度を捨て、尋ねて来た人々を引寄せ同座してこそ仏法を語りひろめることができる。それはひとえに蓮如の積極的傾聴の態度に支えられている。ここで注意したいのは、平座に集まる人々とは日々の生活のみに明け暮れ、仏法など心にかけてようともしない愚痴無智の人々であるという点である。この点に平座を創造した最も大きな理由があろう。蓮如の思想や態度は、この愚痴無智の人々と深く関係する。それは『御文章』を「十の物を一に」選取し、「たのむ一念」を「雑行をすてて後生たすけたまへ」と、一心に弥陀をたのめ」と具体化したのもこの点にある。

ところで蓮如は門徒に対し、熱爛や冷酒・雑煮等を出し門徒の労をねぎらう態度を取る。門徒を「開山聖人の一大事の御客人」と言う態度は、親近感をもって門徒との断絶を回復

するばかりではない。門徒をまた「とももの同行」と言い、ともに仏法を語り合う仲間という意味で使う。同行の寄合について、繰り返し、信不信ともになが身に引寄せて心にあるまを口に出して人に直されるように心を運べと勧めている。心に取繕ったことを口にするとは、法義話にはならない。

本音の心が触れあうことで、法義が深まることを蓮如は敏感に感じていたのである。また本音を語れるような雰囲気、共感的過程がなければ本音を語れとは言えないことを意味するものであろう。そこに積極的傾聴の意味がある。この蓮如の積極的傾聴の態度によって、従来、貴族的態度による疎外・抑圧を受け自己自身の存在価値を見失っていた門徒が、人間性を回復し新しい自己に気づくことになったのではないか。

そこでこの蓮如の積極的傾聴の態度は、どのような思想に基づくのか。『空善記』九三条には平座における蓮如の態度を示し、「身をすてて」とある。この態度には、同座する門徒に対し貴族的態度を捨てるとともに、親鸞の仰せを聞くという二義がある。この態度は、更に蓮如独特の「無我」という言葉に示される。『實悟舊記』九五条には「ひとにまけて信をとる」とある。これは世間と仏法の違いを述べ、世間には「ひとにはをとるまじきと思ふ心」（我）によるが、仏法には「ひとにまけて信をとる」（無我）こそ「仏の御慈悲」があると示す。そこに人間の我心が仏法によってどう転じられる

かを明らかにしている。この我について『昔物語記』一四  
条には、誰一人「私は罪が深い」と思うものはないが、その我  
心によって真実に「仏法のそこ」を知らず、その我心を翻し  
てこそ真実に仏法のそこが知れるという。仏法のそこを遮る  
ものは我であり、我を翻すことが無我になるといっているので  
ある。その意味で、無我とは自己喪失や無責任ということでは  
なく、我によるあらゆる意味での観念化閉鎖化をきらって、  
心を常に新鮮な流動の状態におく自由な精神であり態度であ  
るといえる。更に蓮如は聞法のなかで無我を示す。『榮玄記』  
九条には、蓮如と法敬坊との問答（法義話）を記している。

「いま・ここ」の場で、心に触れるありのままを口に出して  
懇ろに聞くことが無我（我のなきこと）だという。無我の語  
義解釈を聞くのではなく、蓮如と法敬坊との実存関係の中  
で、心の営みを通して「ひとにまけて聞く」（過程）なのであ  
る。また、我とは聞法を遮るものであることを示す。我と  
は、仏法を知識としてそれ以上聞かない態度、関心の度合い  
から仏法をなおざりにして聞こうとしない態度である。我を  
先とするを「ものしりがほ」や「まゐらせ心（自力の心）が  
わろき」として、その心中を翻し本願に帰せよと勧める。こ  
の我について『御文章』一帖目一通には、安心（信心）の次  
第を知らない大寺院の住職が、信心を沙汰する所へ行つた弟  
子に対し厳しく戒めた事実を批判して、住職自身も弟子も信

蓮如にみる無我について（吾 勝）

心決定できないのは住職の我による「自損損他のとが」であ  
ることを明らかにしている。蓮如において「仏法は聴聞にき  
はまる」「仏法は讚嘆談合にきはまる」という、その実践倫理  
は無我にある。ここに蓮如の積極的傾聴の態度は、仏法の無  
我に基づくと考える。「おれは身をすてた」という蓮如の無我  
的態度は、仏法のそこを知るといふ信心決定とともに、そこ  
に止まるのではなく、その態度は对人的にも積極的傾聴の態  
度として開かれる。その意味で無我の問題は私自身の問題で  
あり、われらの問題でもある。そこに「身をすて」て平座を  
独創した蓮如の意図があろう。平座における仏徳讚嘆の場と  
は、無我の深みをもつ積極的傾聴による共感的過程である。

以上、ロジャーズの「人間中心アプローチ」の視点から、  
对人的態度を手掛かりに、蓮如にみる無我について考察し  
た。ただ問題は、蓮如の捨身の行によって独創された平座の  
精神が、今日、真宗教団のなかに生きていない事実である。  
この点に、われわれが蓮如の思想やその実践倫理を明らかに  
しなければならぬ課題が残されているといえる。

1 ロジャーズ著『人間尊重の心理学』参照。（一九八四年 創  
元社刊）

〈キーワード〉 無我、平座、共感的過程

（龍谷大学研究生）